

# 福田寺だより

発行

55

神奈川県小田原市飯田岡二五七-27

飯田山 福田 田 主 36-27

住職 橋本 尚信

## 東京 墓事 雑情

一区画三十センチ四方に、現実に墓石が建っている。

去る八月二十四日、住職は他の御住職方と一緒に、東京深川に建設された「お墓のマンション」とやらを見学に行ってきました。「お墓のマンション」とは、五階建てのビルに各階ごとにコンクリートで区画された墓（カロート）があり、その上に墓石が建ち水もかけられるというものです。一区画は70センチ×80センチ程度で丁度福田寺の区画の1/4くらいの広さです。

初め見た時は異様に感じましたが、新規に作られていく墓地の在り方の一端を垣間見た気が致しました。それはともかく、その寺の従来からの地上の墓地を見てビックリしました。一区画60センチ四方足らずの墓地の上に墓石が建ち、それがところせましと林立しているのです。その御住職の話によると、深川あたりはまだまだ良い方で、もっと都心部に行くと一区画が30センチ四方

だということ。骨つぼはどのように入れるのかと尋ねますと、地中深く掘って縦に積み重ねてゆくとのことでした。

地価が坪当たり数千円と聞くと、やむをえないことかも知れませんが小田原の感覚ではとてもついていけないものを感じました。

しかし、日本の人口の割以上が集中している首都東京は、すべての面で現代を象徴している場所であるわけですから、東京で通用してこそはじめて現代に通用しうるものであるといえなくもありません。

墓地の形状はともかくとして様々な面で宗教が活躍すべき舞台が有るとおもいます。

多様化する社会情勢の中にあって今、福田寺のあるべき姿はどのようなものか、そして将来どうあるべきか、本堂建設を契機に考えてみることは、大切な事だと思います。

集

特

## 本堂新築工事に進行

銅屋根が聳え立つ

五月の連休明けより始まった銅板工事は、二ヵ月半の日数をかけて無事終了致しました。銅葺きは内藤親方により丁寧一枚一枚仕上げられて見事に葺き終わりました。

夏の暑い日差しが銅板に照り返し屋根の上は灼熱地獄と化しているであらうにもかかわらず、黙々と仕事を続ける姿に、頭の下がる思いが致しました。

最上の棟は服部棟梁の心意気で七月のおせがきの日に上がり、その全体の雄姿が示されました。オニは棟に上げてしまうとそれほど感じませんが、下の作業場で見ると随分と大きなもので、それぞれ部分部分がどっ

しりとしていて、しかも全体の調和がとれてはじめて、あの重厚さ、風格が出るのだなと改めて感じさせられました。

屋根ができますと一段と見栄えもして、周囲からも随分と感嘆の声がかれるようになりました。

重厚でなおかつ、何とも云えぬ優雅な姿は、行く末までも人々の目を和ませてくれるものと確信致しております。

現在、工事は天井が張られています。本堂の天井は格天井（ごうてんじょう）という一般の家屋ではあまり見られない張り方で、格子形の組み合わせの正確さ、面取りの技術、

更に内陣は格天井を折り上げるわけですが、その荘厳な仕上がりは、服部棟梁の腕ならではの見事な出来映えで有ります。

天井に先だって作業された、鴨居やそれに伴う長押（なげし）の木口の細工は、正に芸術であることを再認識させられました。細部はこの紙面では申せませんが、機会がありましたらお話ししたいと思います。

この無頓着な住職でさえ、常々感心させられるのですから、服部棟梁の建築に対する気のつかいよう、情熱、一徹さは、計り知れないものがあります。

さて、工事もだいぶ進んでまいりますと、本堂建築を計画している、他のお寺の御住職や寺世話人の方々の見学もポツポツありまして、かつて、私達が見学に回った当時のことを思い出している今日であります。

\* \* \* \* \*

\* 西国札所巡りと高野山 \*

\* ▽ 団参無魔成満 △ \*

\* \* \* \* \*

近隣真言宗寺院で企画しました今回の団参は、一一五名の参加を得て無事に終わることができました。

今回は、高野山の他に西国観音霊場第二番札所紀三井寺、第三番札所粉河寺、新義真言宗の総本山根来寺、弘法大師当時の名刹天野山金剛寺と、寺院参拝が主でありました。歴史に刻まれた紀州路の寺院巡りは、天候にもめぐまれ終始和やかなうちに、思い出深い旅となったようです。

高野山は何度か訪れた人も多かったようで、どっしりとした歴史の中にも着々と変化してゆく、生きずいた高野山を見ることが出来又、宿坊金剛三昧院の心温まる接待や、深山幽谷の雰囲気にはしばし浮世を忘れたことでした。

根来寺は新義真言宗の総本山ですが、さすがにその規模の広大さは関東には比類なきもので、関西寺院の偉容さを見た思いがしました。

粉河寺と紀三井寺は、西国観音

霊場の札所であり、途絶えることのない参詣者に、宗教の不変性と大衆性を見、その役割をあらためて認識致しました。

今回の参拝寺院には、不思議にも全て多宝塔がありました。中でも金剛三昧院の多宝塔の優雅さ、根来寺の多宝塔の壮大さは、その歴史の重みと共に一見に値するものでした。

多宝塔とは、釈尊、多宝の二仏を祀る独特な二重の塔で密教寺院に多く、その均整のとれた形は何ともいえぬ美しさがあります。

古代の人々が何故に非実用的な塔をこのように処々に建立したのか、現代の私達がその塔を目前にして初めて、往時の人々の雄大な精神を知らされる思いがいたします。

く詩く

落ちかかる

月を観ているに一人

焼捨てて

日記の灰のこれだけか

ゆっくり歩こう

萩がこぼれる

大地ひえびえとして

熱のある体をまかす

鉄鉢、

散りくる葉をうけた

うしろすがたの

しぐれてゆくか

師走のゆききの

知らない顔ばかり

山を観るけふいちにちは

笠をかぶらず

柿一つ空へあづけてあった

とってくれる (井泉水)

春風の扉ひらけば

南無阿彌陀仏

水音の

たえずして御仏とあり

風の中

声はりあげて南無観世音

放浪の俳人

山頭火

行事予定

◇ お彼岸 ◇

九月二十日～二十六日

迷いの生存を此の岸即ち此岸(しがん)といい、迷いから抜け出たさとの世界を彼方の岸即ち彼岸(ひがん)という。

彼岸会とは、彼岸に到る法会の意味で、春・秋の二季において、太陽が正東より出て正西に没するから、その日没の処を観じて彼岸の彌陀の浄土として慕う所に起源を持つ。

わが国では、平安初期から朝廷で行われ、江戸時代には一般庶民の間に年中行事化したようである。

歩きつづける

彼岸花咲きつづける